ホームページ http://www.shinjuku-shinbun.co.jp

週刊 新宿新聞 THE SHINJUKU SHINBUN

10月20日 2015年（火曜日）（第1965号）

社章

発行所 株式会社新宿区新聞社 編集・発行人 喜田 勇 新宿区西新宿7－1－25 ワコーレ新宿第2ビル

購読料6ヵ月4,000円、毎月5の日発行、創刊60周年 ☎3369－6195 FAX3369－0759（昭和32年12月4日第3種郵便物認可）

主なニュース

❷面 放25号線新小川町・新設道路で区道が分断
❸面 ツタヤ入居ビル、新宿大通り側が建て替え
❹面 地域に根ざす新宿の遊技業協同組合
❺面 安全安心な街をめざす新宿警備業連絡協
❼面 地域経済を活性化する「四谷法人会」

幅員30㍍に拡幅される大久保通り（神楽坂通りとの交差点）

大久保通り拡幅とまちづくり

道路拡幅・新設工事が進む放射25号線（大久保通り）。新宿では、この道路拡幅によって「街の賑わいが分断される」「生活を支えてきた区道が寸断される」問題が次々浮上。車両を優先させ、その街で暮らす生活者を考えてこなかった従来型の「道路拡幅」が岐路に立たされている。神楽坂通りを交差する約830㍍の区間では、このまま道路拡幅されると、神楽坂通り沿道の賑わいが大久保通りを挟んで東西に分断されると地元では危惧。拡幅される道路幅を車道ではなく歩道にあてるなど『街づくり』と連動した『道づくり』を都側に求めていく。また飯田橋駅方面の延長280㍍（新設）区間では、都側は2つの区道の交差部に1つの横断歩道しか設けない方針。地元からは「区道を分断させないで」と切実な要望が上がっている。

神楽坂通り

賑う街を"分断"するな！

車道幅を拡げず歩道・広場の設置へ

大久保通り 4車線拡幅に反発

『街づくり』と連動した『道路づくり』求める

都道の放射25号線は新宿7丁目の抜弁天交差点を起点に文京区本郷までに至る延長約4・7㌔の幅員30㍍への拡幅・新設工事が進んでいる。

このうち筑土八幡交差点から神楽坂通りを交差し、西側の牛込北町交差点までの約8百30㍍区間は、既存道路（幅員17～18㍍2車線）を幅員30㍍4車線へと拡幅する計画だ。計画では両側歩道幅は2・5～3㍍から6㍍へ、車道幅は現状の12㍍から18㍍へ拡幅。13年11月に事業認可が下り、都側は19年度の完成をめざしている。

▼回遊性が阻害される

この拡幅が現状計画のまま実施されれば、神楽坂の街の賑わいが分断されると強い危機感を抱いたのが地元の商店会・町会やNPO法人の「粋なまちづくり倶楽部」だ。

放射25号線（大久保通り）が交差する神楽坂通りは、神楽坂1～6丁目にかけて商店が連なり、国内外から観光客が多数訪れる。この神楽坂通りを中心に路地裏の情緒ある街並に来街者が回遊することで、神楽坂の賑わいが形成されている。拡幅の幅員30㍍は神楽坂通りの幅員の倍以上の広さ。そうなれば神楽坂通りは大久保通り交差点・東側の1～5丁目と西側6丁目に分断される可能性が高い。交差点を挟んで行われている神楽坂まつりをはじめ、まち飛びフェスタ、神楽坂まち舞台大江戸めぐりなどのイベントもできない恐れもある。

地元商店会・町会などで構成されるまちづくり組織の「神楽坂まちづくり興隆会」。この興隆会の諮問機関である「神楽坂粋な街並みづくり推進委員会」では、今回の大久保通りの拡幅に向けた対応を昨年11月より進めてきた。拡幅計画の中止は現実的に困難な中、住民の意見をできるだけ反映させた将来ビジョンを作成。都側と一緒になって、街の賑わいを維持できる「道づくり・街づくり」に向けた取り組みを進めている。

交差点付近では再開発も

シンポでは地元から活発な意見

「街並みづくり推進委員会」では、これまで6月21日、9月27日の2回に渡りシンポジウムを開催。町会・商店街・企業やまちづくりに関係している学識経験者を交え意見の集約化を図ってきた。9月のシンポジウムでは、1回目に関係者からあげられた問題点を整理、叩き台となる案が公表された。

大久保通りは、現況の2車線下でも交通渋滞は生じず、今より交通量が20%増えたとしても渋滞は年10時間程度にとどまる。そのため拡幅される筑土八幡交差点から牛込北町交差点までの全区間について、車道2車線（片側1車線）を維持。代わりに歩道などの空間にあてる。また歩道と車道の間には専用の自転車道（1・5㍍）を設ける。

さらに神楽坂通りとの交差点部分では「新虎通り」でのオープンカフェなどの取り組みを念頭に、歩道に大きな屋根を設け、交差点広場として活用していくなど、地域主体で管理できる広場の活用を検討していく。

これにより車道の横断距離は現状とほぼ変わらなくなるため、街の分断を阻止。地元の児童・園児の通学路としての安全性も確保できる。広場空間が創出されれば街の賑わいが増すことになる。

また道路拡幅は用地取得に時間を要し、当初見込みより、ずれ込む場合が多い。拡幅によって立ち退かなければいけない建物部分も、拡幅部分よりも広く、残地の空き地が生まれてしまうため、街の賑わいが途絶えてしまうことになりかねない。さらに拡幅エリアに当たる場合、地元に居残り、事業を続けたくても代替地を見つけるのが困難という問題もある。

このことから神楽坂通りとの交差点付近では、地権者との事前協議・合意形成のもと、❶拡幅に伴って生じる残地に暫定的に建築物を建て、商業施設（一部、上層を住宅などに使用）として利用する❷交差点周辺部の地権者の意向がまとまれば共同建て替えや市街地再開発事業を推進する―案が示された。

これらの案はあくまで試案。地元の意見集約のもと、変化させていく。

また道路拡幅は東日本大震災を契機に進展、災害時に防災用の車両用の車線確保のために4車線が謳われていることもあり、防災時の車両通路の確保が課題として残っているのも事実だ。

今後、まちづくり推進委では早期に案をまとめ、興隆会で対応を決議。都と協議に臨む方針だ。

（関連記事2面）

9月開催のシンポジウムで語る石井副委員長

秒読み

▼家族や友達とつながる社会がある。その外には、さらに広い世界がある。「そこで何が起きていて、どう理解すればいいのか。それを伝えるのがニュースの役割」。ニュースメディアの未来についてニューヨークタイムズのCEO・マークトンプソン氏は語る▼だが人々の関心は、遠いシリアの内戦より、身近な仕事や家族、仕事仲間の動向に向いている。1年先の勤務先の景気動向より、ランチタイムに食事をどこでとるか？が気になる。人々は限られた行動範囲の中で情報収集に集中する▼氏はこうも言う。「大事件が起きた時、我々が知りたいのは"なぜ"という点です。その解明に必要なのは長年の知識、専門性、取材先の人間関係、それこそがジャーナリズムの心臓だ」と。それに付け加えると、新聞の持つ"一覧性"が関心の低い世界の出来事についても、人々の関心を誘導してくれる▼最後に「IT化で人々はよりニュースに接する機会が増えている」。問題はそのニュースの発信源だ。聞いたこともないブランドから出されたものより、NHKや朝日新聞の出したニュースの方が信頼される傾向がある。私ども、新宿で62年の地元地域紙のニュース報道も「信頼される」ブランドとして認知されているのだろうか？